

市では、市内の学校に通う児童・生徒に小諸のことをより知ってもらうため、副読本として「こもろヒストリー」を作製しました。ここでは、その一部を連載してお伝えしていきます。

HISTORY No. 11 変化してきた農業



昭和 30 年代はじめの小諸のある農家の様子。南大井地区では、トマトの栽培が盛んに行われていました。当時は、トラクターやエンジンで動く消毒機械もビニールハウスやプラスチックの支柱もありませんでした。

トマトの支柱に使ったのは竹でした。運搬するリヤカーの上に、わらで作った大きな入れ物が見えます。今のコンテナの役目をするものです。大型の農業機械がなかったため、牛や馬を使ったり、人力で行ったりしました。

時代の変化に応じて畑で栽培する作物も変化

- 1 明治時代から第二次世界大戦ころまで**
農家は、自給自足で生活しており、米、麦をはじめジャガイモや大豆など、自家用で食べるものから味噌などに加工するものまで、ほとんど自分の家で作っていました。
- 2 戦後から昭和 30 年代にかけて**
戦争が終わっても、食糧不足は続きました。アメリカでナイロンのストッキングが発明されると、生糸が暴落し、養蚕は大きな打撃を受けました。そこで、大根を栽培して農協へ出荷。農協で「たくあんづけ」に加工して、都会へ出したのです。
戦後、食生活が洋風になったことから、白菜やキャベツなど高原野菜の栽培をしました。
- 3 昭和 40 年代から**
御影地区を中心に、ほうれん草が栽培されて大産地となりました。種をまいてから短期間で収穫できるので栽培する人が増えました。
- 4 平成になって**
連作障害を起こしたほうれん草の後に登場したのがブロッコリーでした。機械化が進み、苗の定植も機械でできるようになり、作付面積が増えていきました。



小諸学
KOMORO GAKU

超大作

全12回

私が住むまち

小諸の歴史

K O M O R O
H I S T O R Y
歴史の なかに、 未来の ひみつが 横た わっている